



晚鈴進善  
一筋道  
上  
明和瓦平序

中村俊定文庫  
文庫 18  
483







千載集

おんをく其とる系成見もて存り

又とふわなまのそ然一

海存急使存まのほも病ふの

水月五日終ふ一

巻下極まり鳴呼制一

〇







あくまのつる物中一六十の男は乃時集の  
序段を讀しつてさし又敷子に後をたす  
昔の今んと何の事かよ、序をたす事な事  
はあつり一程のさめ一又さつり乃た  
つあつり一程のさめ一又さつり乃た  
新あつり一程のさめ一又さつり乃た

あつり一程のさめ一又さつり乃た  
よりさつり一程のさめ一又さつり乃た  
自らつり一程のさめ一又さつり乃た  
つり一程のさめ一又さつり乃た  
つり一程のさめ一又さつり乃た  
つり一程のさめ一又さつり乃た  
つり一程のさめ一又さつり乃た







Wright's Conventions —  
The Art of the Japanese

明治九年晩夏

序由法



七十一翁

晚鈴屋士遺句

秋

一寸一草也

木一林





輓詞

少父晩終今父の位是昨非番可  
在七一う卑月事るる日寸凡可犯  
され榮耀明らるるされハ五全り  
是つて醫療言葉亦ふととんと  
いふも古稀終るる終るる  
すくすく終る水月五月の朝  
前と終る消ゆいぬ呼鳴呼  
父の河へ一終る朝下終る  
天地何くも終る終る  
此一とつたもとと

永為の不二ハ涙と解り也  
養古

一七日

持とれハ七日も流る其の夢

二七日

終持終るもむも輝れも何ん

三七日

燒香やあつりりり山あ



喪中の立替り

水無月の夜を何とせし秋を立

四七日七月の 蓮夜塗

ちうちうとるる文月も二百月

お七白七り千

ちうちうとるる文月の正しくいふ

ちうちうとるる

送り火の燈も西へ消へり

通七日

稲妻やんゆほすくき七七白

掃墳

籠めあふふをそと人切捨

まじりて内をそと門まのまじり、  
まじりての記を返す

修末の部とるる外知れや  
船の事



輓歌

先生を以て世縁終放於一室の古  
地より是れを此の古地は是れ性法  
云々の生歴する生家余と属  
死に及ぶも高きを以て此の位  
の大限に終り西行は此の生  
中より大業を成るとり終りく  
入滅せんと却るる所も欲す那

後多り 裸を涼

—  
狗の月

呂陽

哀詞

夕白千うくむ海や香の玉

在世の交義終るの事

何や角の狗子滑ゆるや此岸

又

そと顔と作けはる—若木並



追悼

以厚平侯之... 追悼

序南

切、此... 追悼

結くとも... 追悼

月忌

うて... 追悼

追悼

追悼... 追悼

追悼

一羊... 追悼

追悼... 追悼

追悼

追悼



法行を常 是生滅法

生滅く已 寂滅為未

善の巻の源一さいく結跏趺坐

從初七日至盡七日

及百箇日各題佛名

以奉伸進福之意

一七日不勅明王

同さうりや下所の漸と地を空

二七日釋迦如来

雲錦山蟬の法法さるる部

三七日文珠師利

偈さるるや智恵の囊の土用千

四七日普賢菩薩

秋の山 何白象の歌は休

五七日地藏菩薩

と心さるるの巻の月の意



六七日 弥勒菩薩

声のくはす 曉告す 鶯の花

七々日 藥師如来

白子久 瑞瑞の意も 州に也

百々日 觀世音菩薩

只形め 以縁 唯く 家一くれ

遠有室道ハ祖父一うけの園之  
 所やして思子女の以う呼思  
 厚親子のうけと承ありけり  
 左うははととと一ある月又日其の  
 客と成りぬぬ 鶯のさしむも  
 早登なりく 偏く園夜にあり 竹  
 矢つるあといそく 在りけり 旅  
 旅路に 鶯の 鶯の 鶯の  
 ありとも今の中一もいなり  
 此中一も 感心満を 傳へ 鶯

月 隠れ 木の 下 園 丸 あり 那

萱子



廿二日

一七日

来迎より天くちちすや花の客

廿七日 寺の心白を一時の  
考の所し公記を

清くまをせまの毛しは一書八

百々日

河の歌やき能ハ秋のあき州

逸有自始士牙すくく

ゆゆ録し〜〜

な〜や人

岡稿

標文

く〜し〜〜〜

せ〜〜〜



世に...

晴後新多良今交昭作菴子  
更拓所れも上尚る名成りる  
とと一水在月の細るる水定と  
成りよるに重くは記念のハ  
風雅のみれは記念のハ

中川尚やぬえきる一郭云 丑粒

又

探そりも暮るいりくお陸

追後

白斗まや巻のぬーのさり 尊

全

花の縁まらや輝のきりー 古秋毫

之 浦の思の屋ハ山のそり

行歩多く集く木の下園路に 賛郷



追悼

亡師の死の伝ふ涙

志留れ葉の捲り 涙の佳き花 南兄

月忌

珠粒千はくし 志留れ葉の下の

七日

めさ水一々 志留れ葉の流る

昨日菴の沙舟 志留れ葉の流る  
志留れ葉の流る 志留れ葉の流る

志留れ葉の流る 志留れ葉の流る 月忌

追悼

一跡ハ志留れ葉の流る 志留れ葉の流る  
志留れ葉の流る 志留れ葉の流る

志留れ葉の流る 志留れ葉の流る 志留れ葉の流る



輓詞

延享の始予々能又在別處下の  
客より加し時時送るるの吟子

此程ハ切れも嬉ぶる三日の歌

と書送るる予々予々予々の  
予々送るる今ハ又去送るる極く  
多と成多ひて右の玉録に  
ハ好り天よりとて此を此に  
さうして予々送るる予々

天地もあらし山山の間節  
君竹

追悼

風絶より水やその日の輝の光  
里洞

念

七郎子持ッカ跡と人と旅一  
壺中

念

友ももせしむるやあつる  
壺中

念

沙の歌ハ流る淋し  
周上



此不有夫我生ハ常ニ日月ノ如ク  
指シめて佳文都郡ヨリ一書ハ  
ある月の名ニ如ク浄土の縁ヲ起ル  
ルヤ一ト云々

思ふに於て水トも有る所ハ  
性山

王の序も於て修去ハ又序文  
一三三

故ハ人映臨我生ノ秀才ト云フ所ナリ  
年阿ノナリト云フ所ナリ  
於トモ風骨ト云フ所ナリ  
追々其の一方体述スル

市中華  
愚口

追悼 石谷氏女

水月トシト清如水ト云  
東雲

念

世際其の又ト云フ所ナリ  
羨英

念

心々々々々々々々々々々々々々々々  
夢村

此後老翁の長女ハ追悼備ヘテ  
其ハ古子の案ト云フ所ナリ

悼  
宗那葉



追善

松月亭

法夢

鬼杖

解中讀誦の

多可那

其平口約宗より老海は伊と極系  
アウウのより一若馬の追善のふとましく  
香ハ四方平結して蓮の花ちりぬ

君里

追悼

時わくを蓮体引物云の如抄い

梅里

念

上界の丑湖へ涼みの佛が那

米剛

彼仙合も西の神くさうと

又去や跡は中結玉那ハ

孤峯







追悼

侍ハ四維漢佛トモテの母 魚天

乞

昨日晴々の景トモテ一久 五岳

おれり上旬末道古内所の  
湯とありて

ソトけんふひハ谷の玉トモテ 龜甲

夢嘆

中水や何と育らん魚成 星古

懐思立海嗟嘆何有

畫四哉風林猶用遺韻

此ノ嘆更原抄其白収

あ改此意

暫一トト蓮の草トモテ梅の香

三句



歌儂

ちりちりやあしのふりちのふ

君休

日影を神と井へ流るる

善古

面をくちん 喉をくちん

車兄

破り行くとも 抱子利こ

休

雨ふやうにさる伝人ふの夜

首樹

吹く 休 のふ風

柳子

昔はあやうく けしの流るる

兄

掃除奇麗な空を夕陽

樹

指續けのあやうく 旅心

休

物とさる 休 の見牙

兄

休 休 休 の 休 休 休

樹

新宝のあやうく 人旅心

休

森 休 休 休 休 休 休

兄

老の難いところ 休 休

古



志運り意の字を何の行を中り  
 深中及び捨く、漸戸相  
 今中 碎ん 他階上 戸花あり  
 十 文お 懐りてやうり入る  
 角落く、麻休足送る 歌々居  
 遠おの灯り 紅い子り  
 浄海子 所とふも 秘を居  
 睡云も 何る 福京の陣

樹 併 兄 樹 併 兄 樹 併

矢のこく 抛り込みのり 地打  
 糸のこく 糸をい 糸うも 糸あ 糸戸  
 生とりの 肉子入 魚子入 石之山  
 又の懐りの 髪子 目 目 目  
 金造子 信のこく 宮へ 教 柳  
 古 珍 表 子 古 白 ぼ 何 子 嘆  
 片 子 子の 杉のこく 逆を 月 信  
 師 子 足 せ 較 於 潔 白

古 兄 樹 併 古 樹 併 兄







追悼

多田小女

折れる松の海をくぐりて 屍 門

念

何れもとどむも白の昔のむ 少妹

念

経とよむもやふ束の束のむ 子戸

七三〇

海の息は静し満ちてく 秋

今更逸史より 在る時好むより  
その多体 故人を哀あはれゆ

今更いも白く 故人は静か 静 静文

追悼

極ふく 弘智の人の静か 未規

念

今より 妙室の友も中と 敬り 珍書

老師泉下の縁りを静かに

うほるもや惜しむる 風の吹送 五古



梅月の白門生大蓮粧を可  
集り老師の教誨終りあやしく  
秘をうけり柳百何の進福と云々

海の新成流も是れも宝市 若名

彩ひのこしく梅世のあ月 乃致

又形をぬ解悟り一本柱をく 序曲

並流る門の四方り草 萱子

存る近のやり願、初所これ 泉古

あのかややのの淋しき 苗兒

振叩くさき平儀平流を平ら 撰文

大玉流子の美を皇骨物 子平

後痛平用ひやされしうん款 子角

はとくすはくくも目やを 岩場

並牡丹も富を中る平まをぬ 抄文

そ清茶の湯氣体湯の境を 東宮

然柳流の春をく仲の銀を名 公文

二海のりして 水戸 一三三



多分下細伊くさき

性山

いふ衆下くくくく

華

海土人のまきちりる月の海

掃又

相も噴風降と政系

又粒

何の時いふ旨も響てそ貴弘

古麓

けけりよのるよの海ぶ

月吹

ちんちん余る体弱大の花盛

賛郷

いふくくくくくくくく

里洞

いふたはくくくくくく

石鼓

其ハ指す成る左方の方

亀由

堀跡一の枕す吹き風

栲丈

柳す及英女の余は凍す

萱子

中ふろん尻服を以て膝を座す

石鼓

世のふゆ子も祇園は

若甫

巧いを紙誰う考てくく

栲丈

他はけりとも切そや

養古



|             |    |
|-------------|----|
| きんぎょの松の冬几手抄 | 君竹 |
| るも子足喜く端人    | 序南 |
| 信心をきく子喜てみ雨時 | 南兄 |
| 無垢子四ハ慈ハく是   | 石鼓 |
| 目録ハハ月の二重云ん  | 角  |
| 傾城の上く南子     | 萱子 |
| 茶舎待候くあ辻の貸小神 | 松丈 |
| 喜ぬの何く一云弦も弾  | 石鼓 |

|               |    |
|---------------|----|
| よーそくハ境もくりし昔切る | 角  |
| 老くの力カハ又立      | 松丈 |
| 休を果の追善くハ掛造り   | 萱子 |
| 日のをくハ巾 劔三豫刺   | 狼古 |
| 京文の牙柱ハ三日月     | 序南 |
| 土瓦 鉄炮子 綿掛 枕之  | 喜南 |
| を近の穂取くハ中ね 臨北星 | 萱子 |
| 考の傳紙 以子 行列    | 凉風 |



大志の多経河多とら 白鳥 龜子

中々帰とらる 如曲と餘く 孫文

吾娘と昇錦手 添字花のる 呂陽

云々毎子 芳一と 州 序曲

未畧

老師みゆらうと 若くは子

若くは子、少少んて送る 南紀園本

いとすの結ねとら 蓮の世 文鶴

晚 鈴居士 追悼

僧列

蓮の香や 小町菴

をり子 跡佛乃

新 ちか



花千枝折一門下  
は乃の廣く人子  
映花主人の身  
昔古子のあし  
平一の海の名  
ろくろり其門下

吉原金門下

江戸

多千ハ流る袖下海

竹路

江戸

東田姓の村

東嶽

美し風人跡

千古庵

略非居老

和功古物

遠くや時

涼風

三

日暮田

山や水

無子

逸世  
あひ  
日市尾

花より風

如水







牛之志必滅ハ裸古乃習ハ然子  
久経ト確ト一小時毎経々々々  
道れおま休を一々黄泉の原  
野向子誰々々と原々々々人

生々生と伴や法の本意なる 中略

追悼

河陽少松

悟正一徳経乃ハヤウの山 壽山

念

丹好中略

風也美るる少系私の情々これ 鳥夕

浪玉映指翁を川面入感あり

本名古主人の云々をり記すあり

同所

父立子所トと妙也色耳の完 龍彦

追悼

眼名美松岳

涼一さり二何と美子の家と家 管字

念

能勢書台

谷川や以涼一美も白州 金笑



追悼

松河

宿新野

夕風千々のとけし川を流るるの聲 ● 首樹

念

東山院

帽子の裾に五、人のきき旅路の爪 葉集

追福

伊丹

一竜泉

草子くはるる五日の風は布衣化 雲郷

念

洛 喜々庵

春千光をさかぬと帰しやまのま 春雄

追悼

九翠亭

携ふおのふとらふのま白水 舞中

念

葵云楼

今つとてこのまき邦へまえんや 如鈞

念

欣々舎

葦床褥出極赤のまき床可申 宇則

念

艶本亭

吹流す日や水は月の新無月 夷拓

念

梅之室

老と咲び一もとけろつまき 因桃



逸仙之隱居の身はくろく少休存子  
まろたのまろくひんそ

丑移半

振足 平うくく 悟はたかひら 馬城

不返轉休時ハ外清整せん 大西

人 成佛まの叶く せんと 輝の声 方邦

俾

毒所

惜まろくく人の蓮の花んく都 杉山

そのの寫実伽落るゆりやうを

まろくくは十年をくく一物なまろく

とのちくまろくはまろくひんそをのちく

半坊

及平まろくまろくはく 清く 才終り 八 倉藤

つく真

可げ廿叩くまろくまろくまろくはく 振部 忌陽

平くまろくまろくまろくまろく 羽六

長門屋小及くまろく店く上世く 石鼓

不ねくく平くお常の風 坊

月のまろく確子中の中の秋津列 葵甫

持衣の幾若くくお助治 枕業



海より紅糸綴

少のうま惜きぬ唐室の湯

幸く解ハ活いぬうは雨のぬ

深瀬吹風ゆるん中

得陽の江もも下る小急解

有女紅妙伝那き淵の水吉

文殊極手嘆少く智恵の歌とす

月の英色小坐釋りく尻

六、 陽、 、 鼓、

清夜中紅活衣紗は袖の白ひ

拙少色若もて 山ハ糖子

花舞と持常ん象戯具ももん

秋の粒う赤少袖活中く

結ナリの穴溜りく帯結幅廣き

下結者きく帯結来運

赤の湖に眺て比叡の日登り

又下岸キ陸く川く網

六、 甫、 陽、 、 甫、



古き年梅折るる至馬の梅とれ  
忘れ篋乃多織扇と  
能事一六解日好ハハの事  
急取山と六酒多海と  
蟹附と折れ紙強くはは舞場  
村と村、續く庵<sup>牛</sup>の子  
大佛の辨をさす小冬の日  
そとくくもをき神並の宮

、 場 、 六 、 、 鼓 、

酒標<sup>ナウ</sup>ナウのち三津の二柱  
法好ハ天、捌正一才  
物と多しと造も何と奥勤  
悟后の部と川昆布とと堪  
昔茶の<sup>ニ</sup>法も過目なる花の森  
舍利探見繁那砂系

、 甫  
、 六 、  
養古  
鼓



五十一年の生師を仔細とて  
百八仙の利を体編んとて  
少らるる尸觸隔り出来の  
三十三法師探りハ早月止  
自らく呼吸探りて  
少くも早月探りて  
くくくくの行ありと  
物士下尸流りて

糸田より廿

未

百泉之郊

怪つる毎子種々小長刀 鬼杖  
考て集るもの 江の招く山然乃松 南兄  
中々廣るる盡 遠分くさく 櫛の深りて  
全 月江の月泊屋、椀の月 如鉤  
竹岡の尼姑、笠の月、 若竹  
下く、物やも折くさき  
月也や甲級のうきも近傍流、 若樹  
<sub>尾出寺</sub> 山由孤高、あまの麻の不成、 琴舎



荃や鯉 昆布の喜海節今佩  
妹脊紅メを 降り書扇に  
掛ひ紅 喜の掛小瓶  
並 理子や尾 舞の三日の友の紅  
田中の井戸乃 荃も口盤  
とくハ麻子ハ 荃紅紙  
中々ハ 荃ささくハ ぬ文子 湯丸立  
名の月紅亭ハ 荃常忠み  
荃声子 荃教の 荃水杯 橋の上  
荃紅子 荃紅紙 荃紅紙 荃紅紙

孤峯、  
羽積、  
羽六、  
公文、  
一三三、  
南兄、  
萱子、

荃荃作 荃荃研 荃荃  
荃荃 荃荃 荃荃 荃荃  
荃荃 荃荃 荃荃 荃荃  
川と女の 荃荃 荃荃 荃荃  
二日荃荃 乃 荃荃 荃荃  
線 荃荃 荃荃 荃荃  
妹の 荃荃 荃荃 荃荃  
荃荃 荃荃 荃荃 荃荃  
荃荃 荃荃 荃荃 荃荃  
斤里も 自在 荃荃 荃荃

荃荃子  
羽積  
荃樹  
五岳  
呂陽  
孤峯



秋お新子孫宜の糸 路 河州弓削 壽山

味林耐の酒とくしり 碑女人堂 緑英

月よ也有うぬ 階の志らん 緑英

黄古も時るの 沁る釜の香 南兄

短子の声流し 女の字はの山 南兄

千尋おたり 大子 学も存 河州弓削 柳旨

焼羊の塊より 体廣うけ 踊り 柳旨

羞具より 踏く 秋乃 稲光也 羽幸

平居ふて 括り 存 嬌乃 味ひ 羽幸

馬と通るも 草紙 細道 羽幸

駕の足 志 梅子 堂 細工 お 者 樹

十日 貸 一切 菴の 山 吹

深 山と 琴 鼓 弾て 行 去 快

振袖のり 子 隠し 和田の 糸 遠 里

仲人 七 する 神 の 跡 糸 石 鼓

る 陰 彦く 才 碓の 切 水 濁 性 山

産 禪 乃 しく 威 こそ 簀 括 緑 英

る 濃 嘉 年 一 彫 け け の 終 河州弓削 連 中

人 多 しい 云 節 の 糸 の 押 壺 連 中



名不ともあつて夜の掛り舟  
凡味悪きしり神了師られ  
毒の族しー減習より  
露干掛くしー紙も紫夕伏  
昔志のふれ短あろし夜  
其を尋んて控るし守との

壽山  
養古

羽衣

麦甫

百三十五之部

秋葉能けく 廣保約中  
五十年の差も温るもすあ

麦甫

孤峯

信人のうしーハ鶴既若 陸垣  
中て廣切  
翁年益終 細しーあま守  
今座の和由大工半婦人  
通し毎深の白し部京の口  
青森の欲孤味ハ切け不の  
ゆ生ハおくるし紙舞む奥の院  
神通也少も志の京教と云下  
三由多吾唐 風柳 の 知  
結細仕の 老と目かたき  
一村しし才 他人呼と也

省樹

丑岳

南兄

緑英

孤峯

南兄

柳音

羽衣

類古

緑英



相撲部 家留少力の弓下ぬ歌 君竹

百四十五鳥之部

尻物りて種へ撞木の意すよふ 石鼓  
台の水系石よくと吐破唱破 琴舎  
云業教すくやき長サと家の花 五岳  
何を吾こても利かぬ名僧 君竹

百五十一鳥之部

弥勒肉々馬名味唱ハサ水色 羽六

去て集り

丹頂の氷倉年下り保千年夜 雉古  
感し入るも銭と存井芳方 羽六  
鉢拵平らつて平路杖の圓寺 兔杖  
結納の酒て兼えたりとせん 首樹  
稲よの写んで奈らぬあまら 羽六  
新浄殿吾の日夜の控拵を来 河列弓削 連中  
行常いぬめいこれあるやうり 公文  
月の友或ハ言雄の連とる事 遠里

百六十五鳥之部

去る雨年城もた琴と蓬髪 萱子



松千喰れくま松の月 羽幸  
月ハ空に音来去大石松場 省樹

百七十泉之部

名孫、産んくく名白斗格 壽山  
音の波しり五く音の月 省樹

百八十泉

去てある馬子く世世録 呂陽  
とれ



